

実体験を基盤とした 食・農・環境教育の実践

教育学部 教授 森 太郎

1. はじめに

大津キャンパスで開講している全学共通教養科目である「環境教育概論」は、教育学部の必修科目であり、1回生約240名が受講している。本科目の食農環境教育分野では、食・農・環境に関して理解し、それらを社会や自分たちの生活と結びつけ、主体的に考え、行動できる学生の育成を目指している。農や食は、植物の生育やそれを取り巻く環境といった自然科学的な面と、生産者や消費者、地域社会、文化など人や社会に関わる面があり、様々な視点から考えることができる文理融合的な題材である。また、受講生は将来教師となる学生であり、自らが食・農・環境について学ぶ（教養）だけでなく、それらを教育の題材として、子どもたちの学びにどうつなげていくのかを考える（専門）ことも重要である。本科目では、教養と専門を結びつけながら、実体験とPBLを取り入れた学習を行っている。

2. 実体験を通した学び

本科目では、学生自身の実体験を大切にし、地域の生産者の協力を得て、田植え、稲刈り、収穫した米の自宅での炊飯・試食といった一連の工程を体験している（図1）。2025年度の受講生を対象としたアンケートでは、田植え後に「泥に足をとられたり、常に腰を曲げていないと植えられない」「しんどい部分も経



図1. 地域の生産者圃場での田植えの様子

験したことにより、食材のありがたみを学ぶことができた」といった記述が見られた。稲刈り後には、「暑いなかで大規模にこの作業を行っている農家の方々の労力に頭が下がる思いがした」「生産者への感謝の気持ちを忘れずに持ち続けたい」といった記述が見られた。

さらに、収穫した米の炊飯・食体験では、『育てる』と『食べる』が一つにつながる感覚を得ることができました」といった記述もあった。このように、一連の実体験を通して、農作業の大変さや生産者の営み、農と食のつながりなどについて実感を伴って理解している様子が見られた。

また、実体験を実施する中で、教員から学生に対して、自分自身が学ぶだけでなく、将来教員になった時にどのように体験や体験を通した学びを創っていくか考えることを繰り返し意識づけるようにした。学生からは、「30分間植えただけでも体力を消耗し疲れを感じた。児童であればもっと時間が短いほうが良いのかもしれない」「知識を深められたことも、教員としての目線が得られたことも全て含めて、体験出来て良かった」などの記述が見られ、実体験を子どもや教師の立場から捉えることができていたと考えられた。

3. PBLを取り入れた学び

小学校での稲作学習では、時間や場所などの制約から、田植えや稲刈り、食体験などの大きな体験活動のみで終わってしまうこともある。体験活動には、それ自体に大きな価値がある一方、気付きや疑問を生み、学びを広げるきっかけとしての役割もあると考える。本科目では、将来教員となる学生自身に、実体験をきっかけとして、問いを立て、新たな学びへとつなげる過程を経験して欲しいと考えた。そこで、稲作の実体験をきっかけとして、7～8名のグループ（32グループ）によるPBLを行った。学生は、実体験をきっかけに問いを立て、食・農・環境をめぐる社会的な背景について調べながら課題を設定した。

また、疑問について調べてまとめるだけでなく、課題の解決に向けて実際に人や地域と関わり、学んだことを行動や発信につなげることを重視するようにした。

グループ活動の例として、田んぼでのイネの成長の観察や生産者へのインタビューを基にして児童クラブで子どもたちに稲作や食について伝える活動、耕作放棄地について自治体や生産者の活動・会議への参加を通して考える活動、もみ殻を用いたアート作品を制作してイベントで稲作について発信する活動が挙げられる。学生からは、「学びは調べて終わりではなく、人と関わり、行動することで深まるものだと感じた」「学習前には問題を知っていても自分には関係のない話と感じていたが、活動を通してその背景を様々な視点から考え、自分にできることは何かを真剣に考えるようになった」などの記述が見られた。実体験を学びのきっかけとして、探究し、行動や発信へとつなげることで、食・農・環境についての理解を広げるとともに、社会の課題を自分自身の問題としても考えることにつながったと示唆された。

4. オンラインを活用した学び

約 240 名が受講する本科目では、32 のグループがそれぞれ異なる課題について PBL に取り組む中で、Teams を活用して学生の活動を共有できるようにした。学生は、対面での話し合いや実際の活動に加え、必要に応じて Teams のチャットやオンライン会議、資料共有などの機能を活用して PBL を進めた。教員は Teams 上の投稿から進捗を定期的に確認するとともに、学生からの相談に応じて対面またはオンラインで指導を行った。

成果発表として、グループ毎に活動をまとめた pdf と 20 分程度の動画を作成するようにした（図 2）。学生は、全グループの pdf に目を通し、関心をもった 3 グループの動画をオンデマンドで視聴した。その後、Teams 上で質問や意見を投稿し、それに対して回答す

るオンラインでの質疑応答を行った。学生からは、「他のグループの発表を見たり、質問をして答えてもらったりする中で、同じテーマでも、活動内容や視点が異なることに気付いた」「質問を受けることで、自分たちの考えがあいまいだった部分に気づき、理解を深めるきっかけにもなった」などの記述が見られ、他グループの成果を視聴し、交流することで、自身とは異なる視点に触れることや自身の探究を振り返ることにつながったと示唆された。

5. おわりに

本科目では、実体験をきっかけとして得た気づきや疑問を探究へとつなげ、実際に人や地域などと関わり行動や発信を行う授業を展開した。学生は食・農・環境について実感を伴って理解するとともに、教育の視点からも考え、さらに社会の課題を自分自身に関わる問題として考えて行動するところまで行うことができたと考える。また、PBL では Teams を活用して過程を記録・共有するとともに、成果発表にオンライン・オンデマンドを取り入れたことで大規模授業においても、多様な探究の過程や成果を共有し、互いの活動から学ぶ仕組みを構築できたと考える。

pdf ファイル	動画ファイル
A-1	私たちにできること～農業の現状と課題～
A-2	やさしいドーン！
A-3	お米の現状とフードロス削減のために
A-4	米の魅力を伝えるために
B-1	米不足と私たちの生活
B-2	米の価格高騰と消費量について
B-3	農業の担い手不足の解消に向けて
B-4	多文化子ども食堂の活動を通しての探究的な学習
C-1	国産米と外国産米はどちらがどのようにおいしいのだろうか
C-2	日本を背負うおにぎりマシーン～飯盒体験とおにぎりの未来～
C-3	昨今の米事情に関して生産者・販売者・消費者の観点から実情を探る
C-4	もっとお米について知ろう！
D-1	もみがらを用いた環境教育
D-2	お米の魅力再発見
D-3	消費者×お米の可能性
D-4	「おこめタイムズ」の制作・発表を通して子どもたちの農業・食についての学習の支援
E-1	二つの視点から見る食問題 ～子ども食堂・フードロス削減について～
E-2	お米の大切さを伝える！
E-3	米の大切さを伝える活動を通して
E-4	お米の今を知り、未来に向けて私たちができること
F-1	ペットボトルを使用した簡易的な稲栽培と米ぬか活用体験の実施
F-2	SDGs が唱えられる中で、教育学を学ぶ学生としての視点、また未来への社会的責任を担う一員としての視点から私たちにできることは何か。
F-3	社会的背景による農業への影響
F-4	農業従事者の現状と課題から
G-1	フードロスと若者の米離れ
G-2	お米を通じた食育活動
G-3	郷土料理と食品ロス削減
G-4	米農家減少問題と米の価値を知る～SNS 調査に基づく考察～
H-1	コメ不足について
H-2	令和の米騒動脱却プロジェクト ～試食を通じた備蓄米に対する印象の改善～
H-3	お米レスキュー隊～みんなで未来のご飯をまもれ！～
H-4	荒廃農地の増加～使われていない田畑の利用方法とは～

図 2. 各グループの探究課題一覧